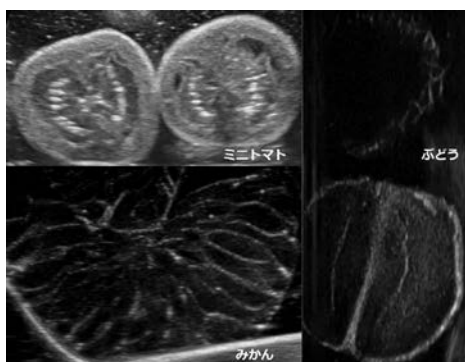


超音波外来診療 エコレジの活動

北海道家庭医療学センター 植村 和平

自治医科大学を卒業し、北海道家庭医療学センターの総合診療専攻医として勤務しています植村和平です。この度は旭川医科大学の梶浦麻未先生からバトンを受け取りました。梶浦先生とは、砂川市立病院での初期研修からの友人で、このような貴重な機会を頂き感謝します。



早速ですが皆さん、こういったエコー画像は見たことはありますか？ 果物は種類によって、切り方が異なります。甘みを均等に分けたいのか、種を隠したいのか、露出させたいのか、大切なのは用途によって切り方が異なることで、そこに唯一の正解はありません。

それはエコーにも言えます。従来検査室で行われていた、系統的走査という言葉に対して、ベッドサイドで医師が行う検査POC+US: POCUS (point of care ultrasound) が出てきています。この表現はよく対比されますが、POCUSには系統的走査が必要ないのか、ということそうではありません。どちらも真実にたどり着くための方法の一つに過ぎず、用途によって使い方が異なるだけだと思います。

自治医大卒業生が、へき地勤務するうえでのメソッドが口頭伝承で脈々と継いでいるものがあります。そのうちの一つに“胃カメラとエコーはできるようにしておけ”といったものがあります。私がエコーを始めたきっかけは単にそれだけでしたが、今ではとてもめり込んでいます。そして今後も当て続けようと考えています。というのもエコーがあることで自分の臨床推論の再確認ができるからです。私はへき地勤務でいつも指導医の先生の指示を受けているわけではありません。そんな中、雑な診療をすることや楽な診断に逃げたくなることもあります。例えば、急性胃腸炎、小児の腹痛に便秘。そうであってほしいという気持ちが混じる診断にエコーを当てて一手間を惜しまないことが、自分の臨床推論への戒めや判断の手助けになってくれます。

2017-2018年砂川市立病院。2019年上川医療センター、2020年道立羽幌病院。現在医師4年目で北海道家庭医療学センターの総合診療専門医プログラムに所属。エコー大好きレジデントで、“エコレジ”と称して活動中。



私にはエコーにハマるまでの3つの“であい”がありました。最初の出合いはPOC超音波研究会に参加して、エコーの幅広さに気づいたことです。従来の領域にはとどまらない医師が判断するPOCUS、そして穿刺だけではなく、整復などの治療につなげるガイド下インターベンション。臨床推論の補完としての使用として、身体所見をエコーガイド下で確かめる、Sonography (超音波検査) と Palpation (触診) という単語を合わせた Sonopalpation という概念。エコーは古い画像検査と考えていましたが、今では、“古くて新しい”検査と気づきました。

2度目は、検査技師の診断能力の高さに出会ったことです。母親が子供のお腹がたまに少しだけポッコリするという症例に対して、白線ヘルニアを見事に診断したときは痺れました。その力をものにしたと考え、エコーを武器として学ぶために、初期研修の時に選択研修としてエコーを3ヵ月修練しました。砂川市立病院の検査科、北大病院循環器内科エコーグループ、北大超音波センターで西田睦先生の下で学び、医師の手元に上がってくるエコーレポートを定性的、定量的指標として部分的な所見にしか捉えていなかったのが、一つの流れとしての理解が少しはできるようになりました。

そして最後はたくさんの機会と指導の先生に出会ったことです。日本超音波医学会、POC超音波研究会、隠岐島前で開催された整形内科診療セミナー、ユニカミノルタによる超音波外来診療などの会や、自治医大の先輩である古屋聡先生、白石吉彦先生、北海道では西田睦先生、並木宏文先生等たくさんの方にお世話になっています。

幸いなことに、エコーを学ぶ機会だけでなく自分が学んだことを還元する機会も少しずつ頂いていますので、今度は私が後輩たちに伝えていければと思っています。